

序

昭和39年に平城宮跡発掘調査部が発足して20年を経過した。発足後10年間は、平城京の大規模発掘は国道24号線バイパスと奈良市庁舎の2件であり、成果は学報として刊行した。その後、今日に至る10年間において、平城京調査の件数は急激に増え、ここ10年間に1000m²を超える発掘が15件、500m²以上のものを含むと32件に達している。これらの多くは単独の報告もしくは概報として刊行しており、大路小路の割りや宅地内建物群の状況を明らかにしてきた。

しかし、いずれも開発に伴う事前調査であり、坪内の大部分を全面発掘した例は少ないから、坪内の状況を明らかにするには一定の限界があると言わざるをえない。改めて、計画的で組織的な調査の必要性が痛感されるのである。

本書は、8世紀はもとより平城京廃絶後200年間にわたってこの地が家地として利用されたことを明らかにしているが、発掘面積の関係もあって多くの問題を残している。一方、本調査区の西隣の坪は、奈良市の調査により総柱の廊状建物、曲池を検出した左京二条二坊十二坪にあたり、この両調査区の間未発掘地にも、開発の波が眼前に迫っているようである。予想される隣接した重要遺跡地について、計画的な調査が行なわれ、保存についての施策がとられるためにも、本書は重要な資料を提供できるであろう。

1984年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足